

時事雑感

現在の医療の進歩はめざましいものがありますが、その背景には常に「救いたいという思い」があり、「チャレンジと犠牲」があります。5000年前のエジプトのミイラの脳には手術の痕があったそうです。心臓にメスを入れれば人は死ぬと言われていたのがまだ50年ほど前の事です。心臓手術をして患者が安



東海メディカル
プロダクツ会長 筒井 宣政

チャレンジ精神と犠牲

ある人に輸血したのが最初のようにです。ところが、副作用で患者は真っ黒な尿を出して4人のうち1人が死亡し、ドニは殺人者として裁判にかけられました。長い法廷闘争の末、結局無罪となりましたが、フランスだけでなく他の国々でも輸血が禁止となり、長いこと行われませんでした。結局は失敗でしたが、助けない

全に助かるようになってから、ほんの30年しか経っていません。それでも人は昔から、「目の前で苦しんでいる人を助けない」という気持ちから、犠牲を伴いながらも様々なチャレンジをしてきたようです。今でこそ輸血は当たり前ですが、1667年、フランスのドニという青年が子羊の血液を、貧血と高熱の

血の本格的な歴史がスタートしたのです。1927年に大西洋横断を果たし、「翼よ、あれがパリの灯だ」で有名な飛行家のチャールズ・リンドバーグは、心臓病の身内を助けようとして世界初の人工心肺装置(心臓を手術するため、一時的に心臓を止めて血液を空にする装置)を、アレ

という思いからのチャレンジだったのです。その後、人間同士の輸血が19世紀初めに行われ、ラントシュタイナーがABO血液型を1900年に発見したことから、副作用が減らせることができるようになりました。またクエン酸ナトリウムを血液に混入すると固まらないことが分かり、輸

キシス・カレルという医師と一緒に開発しました。カレルは1912年、針と糸で血管をうまく縫えば、血液はまた流れるという血管吻合(ふんごう)の考え方でノーベル生理学賞を受賞しました。リンドバーグから身内の心臓手術の可能性を相談されると、人工心肺装置の必要性を説きました。航空機エンジンだったリンドバーグは強い関心を抱き、この装置の開発に大いに興味を示し、苦勞の末に成し遂げたのです。なお、この装置はまだ海のものとも山のものとも解らないときに、ロックフェラー財団が支援したことも、装置が出来上がったもう一つの大きな要因です。医療は大いなるチャレンジ精神と犠牲によって成り立っています。それは「何としてでも救いたい」という強い思いから始まっているのです。